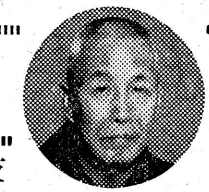
昭和八年五月七日
大阪毎日新聞

紋下津太夫が語る

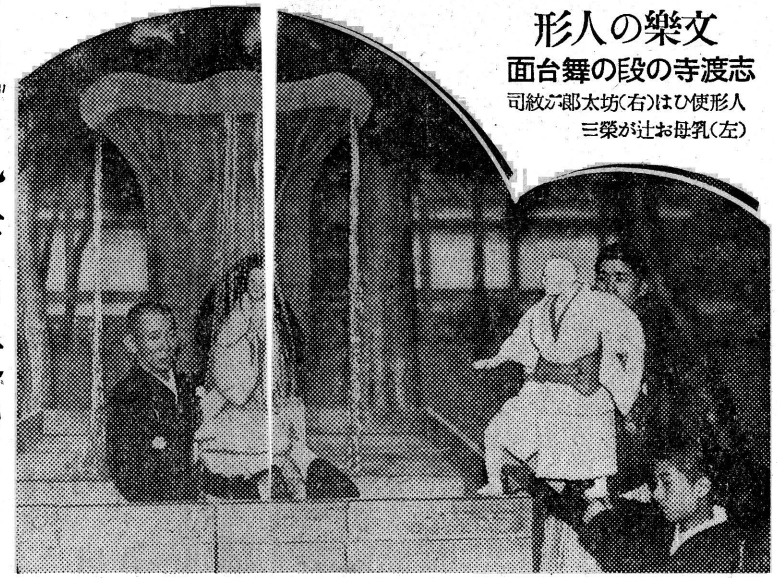
田宮坊太郎の仇討物語『志渡寺の段』『花上野譽の石碑』



津太夫

夜八時五分より
【大阪四ツ橋文樂座より中繼】

紋下譽渡問題にからむ花なみの一部から、晝夜二部興行となつた非常時の文樂座、今日は二回目の中繼で夜の部「花上野譽の石碑」志渡寺の段のうち、切りから中繼される語る太夫は紋下竹本津太夫、淨るりは讃談の「田宮坊太郎」でおなじみの金比羅利生の仇討物語で、津太夫が渾身の藝に紋下の貫祿を示すにふさはしい語り物である



文樂の人形

志渡寺の段の面台舞

司紋が郎太坊(右)はひ使形人
三榮が辻お母乳(左)

『志渡寺の段』あらすじ

乳母お辻の命がけの祈願で

坊太郎が仇討本懷

涙の金比羅利生記

讃岐の家臣民谷源八は、城主にお供して箱根溫泉に遊ぶ中、殿の計ひで、深く契つた品川の遊女其淺と結婚一子坊太郎をまうける、ところが同家中の指南番森口源太左衞門は民谷を妬んでこれを暗殺し、奸臣岩代傳內と計つてお家の重寶を盜む

▼……民谷の遺兒坊太郎は同家中の槌谷內記の情で丸龜家の菩提寺志渡寺の方丈に預けられ、敵に油斷させるため僞唖となつて育てられたが、忠義な乳母お辻はそれを悲しみ、火絕ち五穀絕ちして金比羅大權現に祈禱を込め、三七日滿願の日に一命を捧げても坊太郎の病氣本復を祈らんものと自害する

▼……その日志渡寺では君命によつて森口と槌谷との試合が行はれたが、槌谷はわざと毒酒を飲んだと見せて森口に勝を讓り仇討の計略をこらす、今晩の放送はこゝから初まるので、坊太郎は乳母の祈願で金比羅權現の奇瑞あらはれ、武藝上達して首尾よく森口を討取り本懷を遂ぐる

---淨るり　竹本津太夫---
---三味線　鶴澤綱造---

淨るり拔萃

—◇乳母お辻のクドキ◇—

〽入相の、花は昔と散り失せて、今は老木の乳母お辻、思へば思ひ廻すほど、恐ろしや稚な氣に、盜み心のついたるは、いかなる天魔の魅入りしぞ、顏打まもり〳〵、しばし涙にくれけるが

㊟コレ和子、エヽこなたは〳〵のう、この乳母は敎へもせぬに、いつの間にそのやうな、さもしい氣にならしやつたぞいの、あの桃はこの寺の名物、殿樣へ御獻上のすまぬ內は、方丈樣は愚かなこと、觀音樣へもあげぬけな、いかな頑是がないとても、こなたは今年でもう七つ、恐ろしいといふことの、ちつとは分ちはないかいの、方丈樣の手前、內記樣御夫婦の思惑、おりや恥かしうて〳〵、コレ顏さへよう上げなんだわいの

㊟そのよこしまな心から、父御樣の非業の最後、無念とも思はしやらぬ、不孝の罰が身に報い、生れもつかぬ片輪者、唖となつたに氣がつかぬか、母御はいやしい傾城と、素性あらはす今日の仕儀、コレ人間と生れては、だゞ一心の置き所、賤しうても、腹は借り物

谷源八樣といふ侍の子のする所作かさういふこなたの心と知らず、この乳母が明暮れに旦那樣の無念の最期、おのれ敵を詮議して、討たんものと思ふ內、啞となつたるこなたの業病、藥祈禱も利かばこそ、詮方盡きて當國の、金比羅樣へ立願かけ、病氣といひ立て本心は、金比羅樣へ火の物斷ちに食事を立ち、果物に命をつなぐこの乳母が、淸き身體をいけにへに、その病ひを治して給はれと、祈るお辻が誠の心、稚な心に分るなら、どうぞ心を取り直し

㊟コレ紙一枚塵一本、人樣の物盜むやうな、さもしい心止めて下されや、ヤ、コレ見やしやれ、こな